

## 新刊紹介

親鸞

松野 純 著

本書は、その副題に「その生涯と思想の展開過程」と示す如く、親鸞の思想の展開過程を其の九十年の生涯において考察したものである。この種の單行本としては、今迄に佐々木圓梁氏の「親鸞聖人の生涯と信仰」や鈴木宗忠博士の「親鸞の生涯とその體驗」などが挙げられる。

しかし、いずれも資料に制約があるのに對して本書は豊富に資料を駆使して其の人間形成を有機的に捉えんとされる。著者は前に昭和三十一年度の眞宗史研究會の年報で「親鸞をめぐる諸問題」と題して、多くの研究者のものとした親鸞關係の諸研究を極めて手際よく纏め斯學研究に一つの土臺を築かれたが、今回の著書は正しく其の土臺の上に氏自らの緻密な論考を發表されたものである。

さて、内容をうかがうに、まず第一章「吉水時代の親鸞」においては、建仁元年二十九歳に「棄雜行令歸本願」した所

謂回心を中心として、それ以前の在叙時代にどの様な傳統の中に育てられたか、及び回心後の教人信すなわち傳道について述べる。第二章「承元の念佛彈壓」には、その専修念佛の傳道が遂には師源空をはじめ門下の數人が處刑されるに至る事態について、親鸞と同じく刑の對象となつた安樂・住蓮・西意・行空・幸西・證空の傳道が勸進あるいは態度において偏執である事に注目する。次いで、第三章「親鸞の思想における一念義」においては、彈壓に際して問題となつた安心門のいわゆる一念義の思想と源流について語り、親鸞も亦その一念義の範疇に入れて其の立場を明らかにする。次に第四章「越後時代の親鸞」では、惠信尼との結婚を初め、特に原教行信證がこの時代に誕生した事を述べる。第五章の「東國への旅」においては、越後から東國へ移住される事情について考え、第六章「源空・聖覺・親鸞」の中では、特に唯信抄の著者たる聖覺を中心にして源空および親鸞との關係を見る。次いで、第七章「眞宗の浸透と親鸞の歸洛」においては、基盤となる東國の念佛傳播について不斷念

佛・太子・善光寺如來・彌勒信仰とを概観し、これらを方便としては親鸞は氏の言われる一念信心往生を強く打ち出したとする。更に第八章「歸洛後の親鸞一家」では、その家族の上洛と一家の分散について考察し、最後の第九章「親鸞とその門弟」においては、消息に現われている建長年間における造惡無碍を初めとする異義に關して親鸞は如何に對處し、信を深めていつたかに試論を施された。以上は極めて大まかに要點を述べたのであるが、これらを通じてみると、親鸞が回心を契機として傳道に踏入り、苦澁と忍耐との長い生涯をかけて一念信心往生を力説された事に力點をおかれるようである。ただ、この場合、親鸞が源空より念佛往生の教を受け、特に信一念を強調された事は第七章第三節で論じられる通りであると窺うが、かといつて其の信心は念佛往生の外にありうるものでなくしばしば用いられる信心往生という名目は往生の本來の意味を見失い、割切ろうとすればする程概念的に陥らないかと思う。特に、數多くの資料を以つて證明されると時に眩惑される恐れもあつて、例

えば第六章第五節に嘉祿の法難で隆寛・空阿と共に流罪にあげられた成覺房幸西について正源明義抄に「聖覺房」とある事から、この聖覺房は念佛禁止を進言した聖覺の事と解して理窟をつけていれるが、實はこの聖覺房は右の成覺房の事で彼はまた常覺とも音通で書かれた事は本書の三〇二頁にも紹されている。以上いささか批評がましい事を申ししたが、しかし消息の「やうあること」を法事讚の文に於て、この文を念佛者の未來記と考えて述べられた事などは氏ならではと有難く感ずると共に、廣く關係の資料・論文を涉獵し、志される目的に對してこの様な勞作をものされた事は同學の者にとつて誠に嬉しい著書といわなければならぬ。一昭和三四・三、三省堂發行、A5五〇二頁、定價九五〇圓（細川行信）

梵語佛典の諸文獻

——大乘佛教成立論序説

資料篇——

山田龍城著

この書は著者が東北大學文學部研究年

報第八號（一九五七年）に發表せられた「梵語佛典の文獻學序説」を基礎として書き改められたものである。年報にそれが發表せられるや、われわれ印度佛教の研究に従事している者はひとしくその抜刷の入手を希望したのであるが、近く單獨刊行せられるということであつたのでその刊行を鶴首期待したところのものである。緒言によれば、著者はさきに龍大論叢 No. 287 (1939) に「梵文佛典研究の二方面」という論文を發表して居られ遠くは之に基づいてこの書は成立したものである。そして形式の上からはその副題が示す通り、山田龍城博士の今度の主著である「大乘佛教成立論序説」の資料篇として、その註記の役割を持つていてそれを第一分冊とする第二分冊となつているのであるが、實際はまた獨立した別の大きな意義を持つている。

博士が主著即ち第一分冊である「大乘佛教成立論序説」において述べて居られるように、大乘非佛説の問題は一應解決済みのものであり、問題は次にうつさされている。即ちそれが佛説であるかどうかということより、どうしてそういう佛説

がおこつたかということが問題なのである。現在の學界ではそういう問題が探究せられていて、山田博士のこの著もそれを意圖して居られるのである。大乘佛教は小乘佛教と係りなく成立する。しかし原始佛教から部派佛教の過程を経て、或はその過程と不離の關係にあつて發展して來た大乘佛教の眞價はその過程の考察なしに考えることは不可能である。そのようなことは日本佛教でも、チベットのラマ佛教、セイロンの上座部佛教にしても同様である。そうするとかりそめにも佛教と名のつくものを學ぼうとするものにとつては印度の言葉で書かれた梵文佛典は無視することの出来ない重要な聖典となるであろう。それであるから著者は第一分冊に對する準備としてこの資料篇第二分冊を必要とせられたのである。日本における梵文佛典の研究は西歐國であり漢譯の大藏經を持ち讀むということを有力な立場として日に新たに進められつつある。原始佛教を志すにせよ、大乘佛教を志すにせよ、山田博士のこの著がわれわれ初學者に與へる意義の極め